

留学生を案内する日本の本当の名所とその歴史 第 5 回

<宮城県>

今回は、東北の中心である宮城県に注目してみましょう。宮城県といえばやはり仙台。仙台は「杜の都（もりのみやこ）」といわれています。そもそも「杜」は「木へん」に「土」と書きます。「社」や「森」とは同じ「もり」という読み方でも字が違います。この「杜」という字は呉音で「ズ」（ヅ）、漢音で「ト」であり中国古来の意味では山野に自生する落葉果樹のことを言います。「社」は音読みで「シャ」です。土地の神。神を祭る施設や人々の集団の意味として使われます。ある意味で「家」というような感じでしょうか。そして、「森」は音読みで「シン」となり、多数の樹木が生い茂る場所のことをいいます。

このように「杜の都」の「杜」は、日本の独自の意味で「森」と「社」を合わせたような意味として使われています。実際に鎌倉時代の文献などには「杜の都」と「森の都」の二つとも使われており、明治時代であっても両方の表記が見られます。1970 年（昭和 45 年）に「公害市民憲章」を制定したのを機に、仙台を指す場合は「杜の都」が公式表記と定められます。その説明には、「杜」は江戸時代から仙台の人々が植え育ててきた防風林・防火林・防雪林・防潮林・屋敷林・寺社林・里山・街路樹などの人工林を指し、それらが仙台の風土や歴史に立脚しているという事になっているのです。それ以降、仙台のことは「杜の都」と表記されるようになりました。

逆に、仙台は、仙台藩主伊達政宗が城下町を作るまで「宮城野」といわれた町で、仙台平野は、は風雪を防ぐ木がほとんどなかったと言われていました。そのために、伊達政宗が城下町を作るに当たり、積極的な植林奨励策が採られたのです。人工的に作られた「森」であるから「杜」という単語を使うのですね。植林された樹木は、防風林・防雪林・防火林として機能したのであり、現在よりも森林が豊富であったであろう江戸時代に、美観のために植林されたのではない事は間違いがありません。防風林・防雪林・防火林としての樹種は、冬季に葉が繁茂している必要があるためスギやマツなどの常緑樹が中心です。落葉樹が主である周囲の山や丘陵地の樹種とは違います。

さて、そのような「杜の都」を要する宮城県は、どのようなところでしょうか。また、「観光」ではありませんが、「3・11、東北大震災の傷跡」ということでも、留学生には知っていただきたいことがたくさんあります。そこで、今回は、「上級」「中級」「初級」という分け方ではなく、テーマ別にみて行こうと思います。

<杜の都>

さて、杜の都のシンボルといえば、やはり「青葉城」となります。青葉城は現在半分が東北大学の敷地になっており、日本語学校を卒業した後の「目標」の一つとして見に行くこともよいのかもしれませんが。もともと、この仙台の城のある山を「虚空蔵山」といい、その山頂には「千代城」というものがあり、伊達政宗の配下国分盛重が居城にしていたが、国分が伊達政宗と対立して出奔し廃城になっていました。関ヶ原の合戦後50万石にふさわしい城を作るということで新たな城を作った伊達政宗が、その千代城の後ろに城を作り、明治時代までここに城が置かれています。

ただし、幕府に遠慮をした伊達政宗は、青葉城に天守閣を立てることを辞め、

本丸には御殿しか作ることはなかったのです。よく「城」というと、その象徴のように天守閣がありますが、仙台の青葉城は天守閣がないことがその特徴で、天守閣があるはずのところには護国神社と現在も伊達政宗の像が立っています。

さて、神社といえば、「仙台総鎮守府」といわれる「大崎八幡宮」も仙台の中にあります。

由来によると「平安の昔、東夷征伐に際して坂上田村麻呂は、武運長久を祈念すべく武門の守護神である宇佐八幡宮を現在の岩手県水沢市に勧請、鎮守府八幡宮を創祀しました。その後、室町時代に奥州管領大崎氏はこれを自領内の現遠田郡田尻町に遷祀し守護神として篤く崇敬した為、世に大崎八幡宮と呼ばれました。大崎氏の滅亡後は伊達政宗公が居城の玉造郡岩出山城内の小祠に御神体を遷し、仙台開府後仙台城の乾（北西）の方角にあたる現在の地に祀られました。」とあります。

伊達政宗は、もともと山形県米沢市で生まれ、その後、戦国時代は岩出山でそのほとんどを過ごしています。もちろん、戦国時代ですから現在のような「県境」はありませんので、戦国の政治や敵からの守りを考えて城を替えて行くのは、そんなに不思議なところではありません。その岩出山場内に御神体を移していたということが、当時の戦国大名らしい行動ではないでしょうか。

さて、この「大崎八幡宮」は、もともとは平安時代に武運を祈念するために宇佐八幡の神を持ってきて祀ります。この大崎八幡宮の近くに栄えたのが室町時代の「管領」大崎氏です。大崎氏は清和源氏のひとつ、河内源氏の流れを汲む足利一門で、南北朝時代に奥州管領として奥州に下向した斯波家兼を始祖とする斯波氏の一族になります。この大崎氏の一族が戦国大名で有名な最上氏や天童氏ということになるのです。その「大崎氏」の苗字の由来にもなった八幡宮が、伊達政宗によって仙台に移され、現在の場所に鎮座しています。

社殿の造営にあたっては、当時豊臣家に仕えていた梅村日向守家次・梅村三十三郎頼次・刑部左衛門国次・鍛冶雅楽助吉家といった当世随一の巨匠が招聘され造営されました。豊臣秀吉としては東北の人々に自分の天下人としての威光を見せたかったのでしょう。その様式は入母屋造りの本殿と拝殿とを相の間に繋いだ石の間造りであり、後に権現造りと言われる建築様式は、外観は長押上に鮮やかな胡粉極彩色の組物（斗きょう）や彫刻物を施し、下は総黒漆塗りと落ち着いた風格を現し、拝殿正面には大きな千鳥破風、向拝には軒唐破風を付け、屋根は柿葺と意匠が凝らされております。現在ではこの本殿は国宝になっておりますので、お参りというだけでなく、建築や美術という意味でも一見の価値はあるのではないのでしょうか。

さて、仙台以外では、坂上田村麻呂が平安時代に「本拠地」とした「多賀城」や、近代の城としては伊達政宗の配下である片倉小十郎が居城にした白石城などがあります。最近では白石城はゲームなどの影響で非常に女性に人気があると聞きます。留学生もゲームをやると思いますので、そのような観点から見ていただくのも面白いかもしれません。

なお、完全に私の個人の趣味ですが、伊達政宗が主に居城とした岩出山城（宮城県大崎市）は、現在は建物などは無く、本丸跡に伊達政宗像があるだけですが、その横に「旧有備館庭園」があります。ここは、三代目城主伊達敏親が元禄四年（1691年）に手を加え、春学館（しゅんがくかん）と名付けて家臣の子弟を教育する学問所とした場所で、日本最古の「学校建築」なのです。また茶人清水道竿が造った池泉回遊式庭園で、東北では珍しい大名の本格的な庭園が残ったものです。

あまり有名ではありませんが少し足を延ばして、昔の東北の武士がどの世にして勉強をしていたかに思いをはせるのもよいのかもしれない。

＜震災の傷跡＞

さて、テーマとして「震災の傷跡」を、留学生の皆さんには、ぜひ見ていただきたいと思います。特に岩手、宮城、福島の子県の沿岸、特に何もなくなったところは、ぜひ留学生の皆さんには見ていただきたいと思います。

留学生の皆さんは、日本は先進国で発展した国であるという認識を持って日本に來ているかもしれません。しかし、その様な先進国でもやはり自然の驚異の前では無力です。自然災害の時には、日本に限らず、人々は助け合わなければなりませんし、また、復興もしつかりと行わなければなりません。あまり多くを語るのではなく、留学生の皆さんに様々なことを感じていただきたいと思います。

当然に「被災地」を「観光」とするのはよくありませんが、そこから学ぶことはたくさんあります。できれば、留学生の皆さんに、復興に向けて頑張っている人々と話をしていただきたいと思います。そして、日本人の多くが何を考えているか、あの時どのように感じたか、そのようなことを感じていただきたいです。石巻市や気仙沼市など、発展していたのに、今は何もない、その土台だけ残った姿を見て何かを感じていただきたいと思います。また、気仙沼などはすでに漁港もでき水産加工場もできています。復興に向けて様々な頑張っている、そんな姿もぜひ見ていただきたいですね。

さて、この「震災の傷跡」という意味では二つの場所を推薦します。

一つは「志波彦神社・鹽竈神社」です。鹽竈神社は古くから東北鎮護・陸奥国一之宮として、朝廷を始め庶民の崇敬を集めて今日に至りました。平安時代初期、嵯峨天皇の御代に編纂された「弘仁式」に「鹽竈神を祭る料壹万束」と記され、厚い祭祀料を授かっていたことが知られます。主祭神は塩土老翁神で、謎が多いのですが、伝説によると、東北平定を命ぜられた武甕槌神と経津主神は塩土老翁

神の先導によって目的を達成してそれぞれ元の宮(鹿島神宮と香取神宮)へ帰ったが、塩土老翁神だけは東北に残って製塩法を教えたといひます。鹽竈神社が製塩と密接に関わることを示す藻塩焼神事が、境外摂社である御釜神社に伝わる。御釜神社には、日本三奇の1つである神竈と呼ばれる、直径1m強の4口の竈がある。土塩老翁神はこの竈を使って製塩技法を教えたという。現在でも常に潮水が張られており、屋根のない場所であるにも拘わらず、どんな旱魃の時にも決して涸れることはなく、また溢れることもないと伝えられる。また「塩竈」という土地の名はこの「四の竈」が由来であるともされる。

あの地震の時は、この神竈の水が澄むという異変が起こって、そして大震災になったといひます。鹽竈神社の間近まで津波が押し寄せて、塩竈市の中心部は大きな被害を出しましたが神社は全く被害がなかったということです。海と塩の神の宿る神社、あの津波で被害がなかったそのような伝説と古代の日本人の伝説、自然との共生ということで考えていただけるとよいのではないのでしょうか。

もう一つは、仙台市若林区にある「浪分神社」です。そんなに大きな神社ではありませんが、この神社は、過去の震災の記録をとどめる神社として、今回の東日本大震災で注目を集めた神社でもあります。

現在の鎮座地は、慶長16年(1611年)の慶長三陸地震に伴い発生した大津波のときに当地を襲った津波が二つに分かれ、その後、水が引いた場所だと伝わるのです。また、神社が創建された後、あるとき東北地方で大津波があり、何度も大波が押し寄せ、当地でも多くの溺死者が発生したと伝わる。そのとき、海の神が白馬に乗って降臨し、襲い来る大津波を南北二つに分断して鎮めたといひます。実際にそのような伝説のことが本当にあったかどうかわかりませんが、海岸から5キロも内陸にある神社のところまで津波が来ていたということ、深く知っていただき地震や津波のことを考えいただくのはいかがでしょうか。

いずれにせよ、日本を学んでいただきたい、日本を知っていただきたいという考えからは、日本のいいところ、または日本の先端性ばかりではなく、日本の悲しかった歴史や、日本の苦しかった時も知ってもらう方が良いのではないかと思います。震災の被災地を留学生が大挙して訪れるというのはどうか、というようにも言われています。その点は、ご案内するときに十分に注意して、地物戸の人々と会話し、そして勉強をさせてもらうということを目的に回っていただきたいです。そして日本人の強さ、日本人の逞しさ、日本の文化が自然とともにあったこと、そして古くから伝説や神話・民話の中に日本の地震や津波がしっかりと記憶されていて、それが神社などに伝わっていたという歴史を勉強することは非常に意味があることではないでしょうか。

＜東北の雄大な自然＞

宮城県における東北の雄大な自然は様々あります。それでも二大巨頭は「蔵王」と「松島」でしょう。

蔵王には様々な伝説があります。2014 年後半から噴火のうわさがあり、あまり近くに行くことはできませんが、しかし、蔵王における自然とその自然を題材にした伝説はたくさんあります。この冬の季節は、「モンスター」といわれる樹氷がついた樹木が非常に有名です。

蔵王といえば、観光でいえば「御釜」です。蔵王刈田岳・熊野岳・五色岳の3峰に抱かれた円形の火口湖です。釜状なので「御釜」という名前がつけました。湖面はエメラルドグリーンの水をたたえ、荒々しい火口壁と対比して神秘的な雰囲気なたたえていて、近くまで観光路があり見に行くことができます。今まで26回の噴火を繰返し、最近では明治28年2月15日に噴火しました。太陽光線の当たり方で様々に色を変えるため、「五色湖」とも呼ばれています。南西から

流れ出て濁川となり、賽の碓の北側を迂回して太平洋側へ流れ出ています。

蔵王の名称は、白鳳 8 年（679 年）、大和国・吉野山から役小角が蔵王権現を現在の不忘山（宮城県側）に奉還し、周辺の奥羽山脈を修験道の修行の場としての「蔵王山」と称したことに由来します。蔵王権現は、釈迦如来、千手観音、弥勒菩薩の三尊の合体したものとされ、今でも吉野山の蔵王堂には互いにほとんど同じ姿をした三体の蔵王権現像が並んで本尊として祀られています。神道において、蔵王権現は大己貴命、少彦名命、国常立尊、日本武尊、金山毘古命等と習合し、同一視されるようになりました。その為蔵王権現を祀る神社では、主に上記の 5 組の神々らを祭神とするようになったのです。「蔵王山」はこの辺の山のことの総称で「蔵王山」という山そのものはありません。

蔵王には伝説があります。

まず蔵王温泉。蔵王温泉は景行天皇の御代（西暦 110 年頃）、朝廷が大和武尊に命じた蝦夷に征従軍した吉備多賀由が、戦で蝦夷の矢の毒に侵されこの地に迷い込んだそうです。おりしも美しい山桜に廻り合い彼は思わず手折りました。すると不思議にも、その木の根元から温泉がコンコンと湧き出し、そのお湯で怪我したところを洗ったとたん忽ち治ってしまったと言います。その武将の名前から多賀由温泉と呼ばれ、後に蔵王高湯と改め、さらに蔵王温泉と名を変え現在に至っています。

また蔵王の大和月山は姉妹の山であるという伝説もあります。

太古或る高貴なる神に二人の姫神ありき。

共に月山に祀られんとせしに父神曰く、

「二人とも蓮の花を作らしめ、其の見事なる蓮花を持ち来りしものを月山に遣わし、其の撰に洩れたるものを蔵王山に祀るべし」

と告げしに、二神共力を尽くして作り合い、二花を比較せしに姉神の花や優りけん。

妹神、密かに姉神の花を父に献せしたため、妹神遂に月山に祀られ、姉神はやむなく当蔵王山に祀られたり。

故に今日に至りても、「月山は一度盗みても参詣せよ。刈田山は盗心ある者は参詣すべからず」と伝え居れり。

而して月山を御西、当刈田山を御東と今以て呼べり

これは、刈田嶺神社野社殿に伝わる内容です。日本には山に神が宿るというような考え方があります。そして、その山に宿る神が、さまざまに競い合ったり共同したりというような伝説が数多く残されています。岐阜県の伊吹山や、富士山にも同様の内容があるのです。この蔵王もその中の一つがあるといえるのではないのでしょうか。

その様な神は、信心を持ってしっかりと話をすれば、その願いを聞き届けてくれるということがあります。例えば伊達政宗の七男、伊達宗高もその一人です。

蔵王の刈田山が噴火した時に、庶民が苦しみまた飢饉になることを恐れた伊達政宗の七男宗高は、山の神に民の暮らしや窮状を伝えるために易者とともに噴火している山に登った。そして、易者とともに社を設け、その場で噴火の落下物をものともせず祈禱を行ったのです。そうすると不思議なことに、その祈禱のおかげもあって噴火が収まり山が静まったといいます。しかし、伊達宗高は、その時に山に魂を置いてしまったのか、その後、伊達政宗とともに上洛し、そのまま20歳の若さで京で客死してしまうのです。現在でも、この祈禱を行った場所とされているところ、刈田山の山頂付近に伊達宗高の石碑が立っています。庶民のために、死を覚悟して山の神を鎮めた英雄の石碑を見ても面白いのか

もしれません。

さて、再後に登場するのが「松島」です。

松島はさすがにここであまり解説する必要はないかもしれません。日本三景「天橋立」「安芸の宮島」「仙台松島」のうちの一つです。260を超える島があり非常に素晴らしい景色を作っている。2011年3月11日に発生した東日本大震災とその直後に襲来した大津波によって、島の文化財の一部が破損するなどの被害が発生したが、周辺の自治体と比較して被害は軽微で済んでいます。その理由として、津波は浅い海に入ると速度が落ちて急激にエネルギーを失うのと、松島湾内に点在する島々が緩衝材となり、津波の勢いを弱めたと見られているのです。景色の素晴らしさを作っている松島の大小の島々が、波の力を和らげて、松島の街や瑞巖寺、そして人の命を守ったといわれているのです。

さて、この松島に関しては、私のような表現力のない人物が説明するよりも、過去の偉人に松島を説明してもらいましょう。

<奥の細道より>

まあ古くから言われていて今さら言うことでもないのだが、松島は日本一景色のよい所だ。中国で絶景として名高い洞庭・西湖と比べても見劣りがしないだろう。

湾内に東南の方角から海が流れ込んでいて、その周囲は三里、中国の浙江を思わせる景色をつくり、潮が満ちている。

湾内は沢山の島々があり、そそり立った島は天を指差すようで、臥すものは波にはらばうように見える。あるものは二重に重なり、またあるものは三重にたたみかかり、左にわかれ右につらなっている。

小島を背負っているように見える島もあり、前に抱いているようなものもあり、まるで親が子や孫を抱いて可愛がってるようにも見える。

松の緑はびっしりと濃く、枝葉は汐風に吹きたはめられて、その屈曲は自然のものでありながら、人が見栄えいいように意図的に曲げたように見える。

蘇東坡の詩の中で、西湖の景色を絶世の美人、西施が美しく化粧した様子に例えているが、この松島も深い憂いをたたえ、まさに美人が化粧したさまを思わせる。

神代の昔、山の神「大山祇（おおやまずみ）」が作り出したものだろうか。自然の手による芸術品であるこの景色は、誰か筆をふるい言葉をつくしても、うまく語れるものではない。

雄島の磯は陸から地続きで、海に突き出している島である。瑞巖寺中興の祖、雲居禅師の別室の跡や、座禅石などがある。

また、世の喧騒をわずらわしく思い庵を建てて隠遁生活をしている人の姿も松の木陰に何人か見える。

落穂や松笠を集めて炊いて食料にしているようなみすぼらしい草の庵の静かな暮らしぶりで、どういう来歴の人かはわからないが、やはり心惹かれるものがあり立ち寄りなりなどしているうちに、月が海に映って、昼とはまたぜんぜん違う景色となった。

浜辺に帰って宿を借りる。窓を開くと二階作りになっていて、風と雲の中にじかに旅寝しているような、表現しがたいほど澄み切った気持ちにさせられた。

松島や鶴に身をかれほととぎす 曾良

(意味) ここ松島ではほととぎすはそのままの姿ではつりあわない。鶴の衣をまとして、優雅に見せてくれ。

曾良は句を詠んだが私は感激のあまり句が出てこない。眠ろうとしてもワクワクして寝られない。

深川の庵を出る時、素堂が松島の詩を、原安適が松が浦島を詠んだ和歌を餞別

してくれた。それらを袋から取り出し、今夜一晩を楽しむよすがとする。

また、杉風・濁子の発句もあった。

十一日、瑞巖寺に参詣する。この寺は創始者の慈覚大師から数えて三十二代目にあたる昔、真壁平四郎という人が出家して入唐（正しくは入宋）して、帰朝の後開山した。

その後、雲居禅師が立派な徳によって多くの人々を仏の道に導いた、これによって七堂すべて改築され、金色の壁はおごそかな光を放ち、極楽浄土が地上にあらわれたかと思える立派な伽藍が完成した。

かの名僧見仏聖の寺はどこだろうと慕わしく思われた。

<以上奥の細道より>

奥の細道をそのままここに現代語に訳して記載した。奥の細道で有名な松尾芭蕉は、松島の景色が素晴らしすぎて、「松島や ああ松島や 松島や」としか表現をしなかった。その点弟子の曾良の方がしっかりと句を詠んでいる。しかし、その句が読めなくなるくらい感動する松島は、やはり宮城県に行ったら、少し足を延ばしてでもぜひ行きたい場所ではないでしょうか。日本人の「美」を理解戴きたいですね。